
夜景

宮園キリオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜景

【コード】

N8802N

【作者名】

宮園キリオ

【あらすじ】

夜景を眺めるお話です。

天井が見えた。少なくともそれが天井だと認識できるだけの意識が僕の頭には残っていた。部屋の電気は点いていないけれど、窓から入ってくる光だけでじゅうぶん視界は開けた。オレンジ色の街灯やはじける音のするネオン管のまたたく、満月の綺麗な夜だった。

近くの国道を走る車の音が聴こえる。それらはたしかに連続しているが、いつもどこか不自然なところで途切れていた。そしてその不自然さが彼女と僕をここへ連れてきた原因でもあった。彼女と僕の間にはこういう不自然なものが常に媒介していなくてはいけないことを、僕はそれとなく知っていた。そして自ら不自然なことをしてそれとなく確かめ合った。行為の後にはまるで何もなかったかのように、天井が彼女と僕とその間を行き交う沈黙を虚無へと吸い込んだ。僕がぼんやりと眺めている白い壁紙は、存在に意味を持つものであればどんなものでも容赦なく呑み込んでしまうのかもしれない。そしていつも彼女と僕だけが、それとなくそこにいた。

彼女はブレザーの制服を着たままベッドに横たえている。ショートカットの黒髪も、短すぎる丈のスカートも、何か手を施すでもなくくしゃくしゃのままそこに投げ出している。ダンボール箱の中でひっくり返った捨て猫のような彼女と、それから夜景が綺麗だった。綺麗だね、と僕は言った。彼女はそれには答えずキスをした。そして僕の上に覆い被さり荒々しい吐息と共に唇で唇を塞いだ。衣擦れの音が忙しくなっていくのが聴こえる。垂れ下がっている彼女の髪が顔に触れる。衣擦れの音と彼女の髪。それは僕の知らないどこか遠いところにあるもののような気がした。だけどそれは僕のすべたであって、実際にベッドのスプリングと彼女の肢体に何もかもが閉ざされてしまっていた。なんだか煙草くさい、と僕は思った。

綺麗ね、夜景。

それから彼女は窓の外を指さし、あそこが学校と言った。あっち

は向かいの団地、いつものコンビニ、駅、ゲームセンター、国道二四六号線、車、車、車、車……どうでもいい。彼女は国道の先にある遊園地の観覧車をいちども示さなかった。

未成年のくせに煙草吸うなよ。

車運転してよ、私が隣に乗ってあげる。

免許持ってない。

持ってなくてもいいじゃない。

よくないよ、と僕は言った。そう言うしかなかったと思う。仮に肯定したとしても彼女は何もできないし、僕も何もしてやれない。ここには彼女と僕しかいないのだ。彼女と僕だけが、それとなくそこにいる。遠くに広がっているのは闇夜と夜景。僕を包み込んでいるのはベッドのシーツと彼女の制服越しに感じる体温。

しわになるよ制服、と僕は言った。しかし彼女はただ黙って夜景を眺めている。

一着しかないんだろ。

しかし沈黙したままだった。

夜景なんか見て何が面白いの。

沈黙。

どうしてこんなところに来たの。

沈黙。

あのさ、こういうのはやっぱり変だ。

どこが？ と彼女は言った。制服を着てホテルで夜景を見ること、どこが変なのかしら、生徒手帳に書いてあるでしょ、学校の外でも常に制服を着用し我が校の生徒としての誇りを持つことって、だから私はいつでも制服を着てるの。

学校が休みの日も？

そう言った瞬間、しまった、と思った。学校が休みの日に彼女に会いに行ったことがないのに気づいてしまった。実際、僕は彼女のことをその程度の存在としか思っていないのかもしれない。息を殺して固唾を呑んだときにはもう遅かった。彼女は一瞬だけ唇の端で

微笑み、そして僕の頬をぴしやりと打った。真っ白になった頭の中を衝撃だけが貫いていった。それはさっきまでの煙草くさい彼女を粉々に破壊して、手首の傷を僕に舐めさせる姿に変わっていった。そのとき、今日の放課後ちよつと付き合つて、と言つたのだった。何のために僕をここまで連れてきたのかは知らないが、今はとにかく頬にひりひりとした感覚があるだけだった。

そして彼女は泣いていた。

泣きながらこう言った。

どうしてあなたはいつもいったあと膝を抱えて坐り込むの？

おに見つかる、隠れなきゃ。僕はかくれんぼをしていたときのことを思い出す。

ヘルマン・ヘッセの『車輪の下』で、主人公ハンス・ギーベンラートに年上の少女エンマが「私にキスしてくださいださらないこと」と言つたのを憶えている。文庫本を読んだのはもう三年前のことだった。なぜそんな本を手にとつて頁を捲つてみる気になつたのかは知らないが、たしかに僕はハンスが二番の成績で神学校の試験をパスしたことを知っている。

三年前、夏休みが明けたばかりのひどく蒸し暑い日の昼休みだった。いつもそうなのかは解らないが、図書室には貸し出しの受付をするための図書委員がひとり、厚いハードカバーで顔を隠しているだけで、あとは誰もいなかった。生徒の読書事情なんてそんなものなのだろう。それにしてもその図書委員は真面目な女子だった。僕はそこで何に導かれるでもなく、それでいて何かに誘われるように『車輪の下』の文庫本を手にとつた。読んでいる途中で、どうして僕はこんなものを読んでいるのだろうと何度も思ったが、ハンスの末路を見届けてしまったわけだから結局読破したらしい。あんなつまらないものは二度と読むもんか、まったく文学かぶれの気が知れない、と思うのは僕だけだろうか。

次の授業は体育だった。そのとき僕らは物陰に響くチャイムの音を聴いた。

ここにいれば大丈夫よ、と彼女は言った。誰にも見つかったりしないわ。

ここはどこ？

彼女は口笛を吹いた。バッハの有名なカンタータだった。私は流行情の曲が嫌いなの、テレビとかラジオで流れてたり、雑誌に載ってるアーティストとか……どうでもいい。

僕は沈黙した。その間にどれくらいの時が経ったか、解らない。

彼女は、膝を抱えて坐り込んでいた僕の背中に身体を寄せて、腕をゆっくり前へまわした。背後から抱きしめるかたちになった彼女は、僕の耳元でささやくように、私がやさしいって？ と言った。

私はね、価値が欲しいの、何物にも揺らぐことのない絶対的な価値が欲しいだけなの、それなのにどうして自らを没落へ追い込まなきゃいけないの、私が流行をもてはやす奴らを助けるためって？ 助けようとしたんじゃないの、奴らがメディアの捏造に騙されてるまぬけ面を拜んで嘲笑ってただけよ、ほら、他人の不幸って最高に面白いでしょ。

彼女はしばらく僕の左肩に顎を乗せてもたれ掛かりながら、腹の底から嘲るように窒息しそうなほどの笑みを洩らしていた。それから顔を上げると彼女の表情からは嘘のように滑稽がはぎ取られていて、いつの間にか頬には妖艶な淡い色がぼつりと萌しているのが見て取れた。それが絶対的な価値とやらを掌の上で転がす甘美に酔いしれた表情なのだろうか、と僕は思った。彼女は、決して大きいとは言えないけれど黒目がちで睫毛のわりと整った、前髪に隠れてしまいそうな瞳を上目遣いにして僕の横顔に注いでいる。

とにかく彼女の双眸は黒ばかり際立っていて、そのくせ前髪をわけたりしないで揃えて伸ばしているものだから、近寄ってみないとどんな表情をしているのか解らなかった。感情を顕現させる鼻梁や口元の稜線はどこどこ小さく丸く、あとは比較的ならかな曲線が多い。特に曲線が目立つのは頬で、前髪と鬢辺りの境界に沿って絶妙に描かれた輪郭はとてよやわらかな印象で魅力的だった。そ

して僕は彼女の身体の部分でそこがいちばん好きだった。笑顔のときも、怒ったときも、泣いているときも、いつでも雄弁に彼女の感情を語っていた。

僕は彼女の頬にキスをした。すると彼女はいつも決まって、猫がとろけた声で甘えるような、ごろごろとした所作をみせる。そしてそんなふうに応えてくれれば応えてくれるほど僕はこう思ってしまう。こうしている間にも彼女は他人の不幸を嘲笑っているのだろうか。もしそうだとしたら僕らはどこにも行けないだろう。彼女と僕だけがそこにいるだけで、どこにも繋がっていないから。

僕はどこ？

どこにも繋がっていないから因果律は何も導き出さない。それは僕が求めたときだけその向こうの彼女が動き出すことを意味しているのだと思う。僕が右手を差し出せば彼女は左手を、左手を差し出せば右手を差し出し、両手を合わせればそれはまるでパントマイムでもしているかのようにお互いを現実と幻想に隔たっている壁に触れさせる。そしてその汚れた手は相手を自らの泥で覆い隠してしまう。決して手と手が重なり合うことはないのだ。だからといって離れようとしたところで、その幻想は自らの影なのだから離れられるわけもなく、向かい合った鏡が映し出す像のように無限と続いている。結局その影から逃げきるには汚れた手で壁を一面塗りたくって心を堅く閉ざしてしまう他ないのだ。汚れた手を舐めて泥を飲み込んだとしても、背徳の汚れを擦りつけてくる彼女がいるかぎりそれは無駄なことなのだ。現実はいつもしも不条理を伴って彼女と僕の間割り込んでくる。それに対して僕らのしていることはあまりにも浅はかで滑稽な現実逃避でしかなかった。そして僕は今もそこにいてそのときのまま快樂に身を委ね、行為が終われば膝を抱えて坐り込むことしかできないでいる。

ねえ、口笛なんて吹いてないで僕をここから出してよ。

どう考えても昼休みの時間だけで文庫本を一冊読みきれぬわけがなかった。けれど僕はその結末を知っている。きつとどこかで続き

を読んだのだろう、とそのときは思っていた。図書室を出た長い渡り廊下にはねっとりとした午後の日差しが漂っていた。開け放たれた窓からは射し込む陽が淡い光沢を床に棚引いていた。そしてそのまどろみの中に彼女がいた。彼女と僕は出合った。

かくれんぼしましょう、と彼女は言った。予鈴はもう鳴っていた。次の授業は体育で、始まる前に体操着に着替えなければいけない。しかし僕は上履きのまま校舎から出た彼女を夢中で追いかけて、そして気がつくまで裏庭の花壇にいた。そのとき僕の取った行動はいま思えば正しかったとも間違っていたとも言えない。何かのせいにするとしたらきつと『車輪の下』だ。

後悔してる？

僕の耳元にかかる吐息はだんだん熱を帯びてきている。そんな彼女はどこまでも悪戯っぽく微笑んでいた。その無邪気さに救われているのかもしれない。僕はここへ来るまで背徳という二文字から目を反らしてきたが、彼女の笑顔を見るたびにそう思ってしまうのだ。後悔してるかもね。

うるさいたつてるくせに。

と、彼女は僕を包み込んでいる両手をもつと奥へ滑り込ませる。そんなとき僕は、彼女がなぜそんなことをするのかをなるべく考えないようにしている。考えても無駄だからだ。とつくに麻痺してしまったと思われた鼓動がまた聴こえてきて、何もかもを放り出したくなる。彼女の口癖を真似してみれば……どうでもいい。細い指先が触れるたびに、背徳の隙間からこぼれてきた足音が近づいてくる。チャイムの音だ。体育の授業が終わった。

教室に戻ったときには既に放課後で、残っているクラスメイトが幾人かいるだけだった。彼らは鋭い視線で僕らを容赦なく突き刺し、僕は僕で思わず握っていた彼女の手を離してしまった。僕の手が震えていることを知られなくなかった。どうしようもなく怖くなってしまうのだ。だけど何を恐れているのか自分でも解らなかった。あんまり気にしなくていい、と言った僕に、彼女はどこか間延びし

た声で、あんなことをした後で何を言ってるの、と答えた。

あんなことって？

解ってるくせに。

解らないよ。

初めてだったの。

でも血が。

体育出てなかったけど、とそのときクラスメイトのひとりが尋ねた。どこ行ってたの、保健室？

ああそうなんだ、と僕は彼女より先に言った。相手が彼女か僕かどちらに尋ねたのかは解らなかった。そうなんだよ、彼女がなんだか貧血を起こしちゃってさ、それで僕が保健室へ連れていったんだ、もう大丈夫だよ、痛みも特になかったそうだし。

痛み？ と彼女は言った。何も知らないくせに。

それから彼女と僕はお互い黙りこくって帰り道を歩いた。その沈黙はまるで深海の底の海溝よりも深く暗く、プレートとの侵食と共にマントルに呑み込まれていくのをただひたすら待っているだけのよう感じられた。夕陽に照らされて長く伸びたふたつの影ですらもう遠く過ぎ去った幻想でしかなく、そのときはただ重たい現実だけが僕の上のしかかっていた。僕は彼女にひどいことを言ってしまった。これ以上彼女を傷つけないし、今の傷が癒えるのなら何だってするつもりだ、と漠然と考えていた。これほど自分が恥ずかしいと思ったのは生まれて初めてだった。これほど自分が恥ずかしいなんていうか、その……ごめん。

やっと出てきた科白はあまりにも陳腐で、僕の思いを代弁するには物足りなかった。きつと甘えていたのだろう。そうでないとしたら、ただ不器用なのを解ってほしかっただけなのかもしれない。時間さえあればおざなりな言葉にも意味を伴わせることができるかもしれないが、目の前にあるものを拾い上げていくと、言葉に表せない感情なんていうものは嘘だと言われているようで、実際にも言えない僕はただ後悔することしかできなかった。

歩幅の狭くなつた僕をお構いなしに彼女は歩き続ける。ただ何も答えないわけではなかった。彼女は肩を怒らせるかわりに、どうして、と言つた。どうして尋ねられたとき正直にセックスをしてたつて言わなかつたの。

言えるわけないだろ。

下手な嘘つくからこうなるのよ。

じゃあどうすればよかつたんだ。

だから正直に言えばよかつたの。

それじゃ駄目なんだよ、と僕は言つた。とにかく僕はよかれと思つて嘘をついたんだ。

それだつたら、と彼女は言つた。どうしてあなたは私に付き合つてくれたの、ただの遊びだったの？

そんなんじゃない、と声を大にして言いたかつた。……そんなんじゃない。

気がつくのと抱きしめていた。下手な嘘も陳腐な科白も、何もかも振り払つて彼女を理解したかつた。彼女の痛みになりたかつた。だけれどこれ以上彼女を傷つけないと思つている自分もいるのだ。その細い首筋をどんなに愛撫しても華奢な肩をどんなに抱き寄せても違つた温度という隔たりを思い知るだけで、強く抱きしめれば抱きしめるほど僕は自分自身に対する慰めを自覚するしかなかつた。小さな背中が震えているのを掌に感じる。いや、震えているのは僕の手だ。彼女のことを壊しているような感覚に陥る。溢れんばかりの紛れもない感情、遣り場のない欲情、そしてどうしようもない愛情。その向こうで彼女は僕に微笑を投げかけ手を振つてくれているだろうか。いつでも笑つていてほしだけだつた。けれど結局僕は幼稚で、あのとときと何ひとつ変わつていながかつた。自我の駆け引きの中でサレンダーを忘れ、ふざけながら飛び降りた無重力の中でペルソナを被る。ごめんなさい僕は性的なことがしたかつた、いやらしいことがしたかつただけなんだ。だけれどもそれが誰の感情なのか解らない。そうだ、いま彼女はどんな顔をしているのだろうか。

頬は……頬に触れたい。

ペールを纏ったようだった。夕陽は頭を垂れた彼女を紅く染め、そして気づかないほどゆっくりと僕を衝動から解放していく。その瞬間、息を呑む。彼女は無邪気な笑顔を降り注ぎ、また誘ってもいいかしら、と尋ねる。断る理由は見つからない。僕の目の前には、屈めた腰の辺りに後ろ手を組みながら、上目遣いに視線を浴びせてくる彼女がいるだけだった。ねえ、また誘ってもいいかしら。

別に、いいけど。

いつの間にか僕らは夜景の見える場所に来ていた。これがあのとき望んだことなのかは解らないが、望まなかったとしても他に行き場はなかっただろう。後悔してる？ と彼女はいつまでも無邪気な瞳で僕を見透かす。あんなことをした後で何を言ってるんだ、解ってるくせに。

後悔なんてしてないよ、と言った僕の横顔を彼女は思いきり引っぱたいた。それからこう呟いた。私が守ってあげる。

僕は嘘つきなのだろうか。

何かのせいにするとしたらきつと『車輪の下』だ、とそのとき僕は思った。なぜ体育の授業に出なかったのか先生に尋ねられる。すると僕は読書をしていたからと答える。精一杯の抵抗だった。しかし先生はそれを裏目に出すような叱責を浴びせる。文学を読めばいいってもんじゃない云々。その瞬間、彼女が勢いよく席を立てて先生に飛びかかる。しかし簡単に払い除けられてしまう。彼女はクラスメイトに手足をpushえられながら先生を威嚇し続ける。一緒に保健室に行ってたそうです。どこからか声がする。だけどそれは僕らを押搦しているようにしか聞こえなかった。僕は改めて、なぜ体育の授業に出なかったのか考えてみた。しかし図書室で『車輪の下』を読んだ後のことがどうしても思い出せなかった。

私が守ってあげる、と彼女は言った。私と付き合ってくれたのは遊びじゃないってあなたは言ったでしょ、だから私も真剣にあなたを守る、それでいいじゃない。それから耳鳴りに顔をしかめる僕を

容赦なくアスファルトの地面に押し倒し、そして馬乗りになった。全身に衝撃が伝わる。僕は身もたえする間もなく、彼女の流れる髪から射す夕陽に眩む。そこに浮かび上がった顔には涙があふれていた。彼女は、私が守ってあげる、と何度も叫びながら僕の頬を平手で打ち続けた。その悲しげな表情をぼんやり眺めながら、僕は『車輪の下』を読んだ後のことを思い出していた。

そのとき彼女と僕は体育の授業をさぼってかくれんぼをしていた。そこは焼却炉の隣にある、ダイオキシン発生を懸念されての廃棄に伴ってゴミ集積所としての役割を終えた、電話ボックスほどの大きさにその半分くらいの高さのある物置だった。そこはやはり何の用途もないのか空っぽで、それに網目になっていて一部の窓から光も射し込んでくる。隠れる場所としては悪くなかった。

外の様子はどうなってる、と僕は窮屈なその中を見回しながら彼女に訊いた。網目の窓は彼女の振り向ける先にあつた。

ここで一緒に死にましよう、と彼女は言った。
え？

それができないなら私を殺して。

ここで一緒に死ぬことも、君を殺すこともできないよ。
どうして。

そのとき僕はかくれんぼをしているということを忘れそうになった。それから、なぜこんなところに隠れているのだろうと考え始めた。そもそも隠れているのは彼女と僕だけで、誰もかくれんぼなどしていないのかもしれない。

どうして、と彼女は言った。どうしてこんな質問に真面目に答えるの。

君が死んだらいろんな人が悲しむから。

いろんな人って？

家族とか、友達とか。

あなたは？

もちろん僕も悲しむ。

それから彼女は妙に納得したような表情を浮かべて口笛を吹いた。その音色は音階を行ったり来たりしていて、最終的にどこか知らない場所へ落ち着こうと必死にさまよう存在のための寛容というものを表現しているように聴こえた。僕はそれを咎めるでも促すでもなくただぼんやりと耳を傾けていた。五時間目の体育の予鈴が遠く聴こえた。彼女は口笛を途切れさせると、どんな音楽が好きなの、と僕に訊いた。

それクラシックだろ。

そうよ。

クラシックはあんまり好きじゃない。

僕は登校のときに聴こえてくるグリーグの「ペール・ギュント」とか、給食時間のバツハの管弦楽組曲とか、清掃時間のモーツァルトの「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」とかが嫌いだ。弦楽器の旋律にあわせて学校生活が過ぎていくと思うと虫唾が走るのだ。いつか放送室を占拠してロックをかけてやりたいと思う。

好きなバンドがあるんだ、と僕は言った。彼らはちょっと変わったスリーピースバンドでね、UKロックに影響されてデビューしたはいいけどぜんぜん売れないんだ、僕らが生まれる前から曲をだしてるようだけど今でも相変わらずだよ、自分たちのことを「異邦人」とか「よそ者」とか呼んで揶揄されてる。

なんかかつこよさげ、と彼女は言った。

彼らのことは僕しか知らないんだ、というのもいちおうメジャーではあるけど周りの人たちに聞いても誰も彼らのことを知ってるっていう人がいないから、きっと僕だけが彼らの音楽を理解できるんだと思う、音楽を理解できなければ知ってるとは言わないからね。

私には解るかしら。

彼女のほうを振り向く。そのとき僕はこの埃っぽい薄暗がりの中、漂う塵を浮かびあがらせている一条の光が射し込むのを見た。そしてその先に彼女の双眸を認めることができた。ただそれはどこか邪な、あざとさの残った、ずるそうな自我に塗りつぶされたものだった。

た。それから三年間にわたって、僕が彼女との行為の後で体育坐りをしなければならぬ理由は、まさにそのときその瞬間にあった。僕は彼女の黒い両方の瞳に映った自分の姿をいままで再現しているだけだった。それはやはり必然的で、彼女が常に制服を着ているのと同じで、永遠なんてものはこの世のどこを探しても見つからないと割り切って考えていながら、実は人一倍、いや二倍も三倍も十倍も百倍も果てしなくその存在を信じたいと願っているということだった。私には解るかしら、と、その言葉は口笛で奏でたクラシック音楽とは裏腹にとても浅はかなものだった。そうと解っていないが、僕は彼女の自我に塗りつぶされた双眸を認めるとき、自らの中に彼女のそれと同じものが萌している脈動をはつきりと自覚してしまった。こうなることは最初から決まっていたことなのだ。

彼女は僕のズボンの中に手を滑り込ませて、これなに、と言った。硬くなつて、大きくなつてる。

やめてよ。

やめない、教えてくれるまで。そう言つて彼女はそれを指で無造作に撫でまわす。

たしかに理性では拒絶を望んでいるのだが、肉体というものは本能的にその感覚を抗いがたいものだとして学習していた。それから僕はただ妖艶というものに応える所作に身を任せるしかなくなっていた。僕は彼女のスカートの中に手を潜り込ませて下着の上から陰部に触れた。張り詰めていた皮膚は一瞬だけ硬直してから僕の介入を許した。掌の感触で知ることのできた彼女は、春の陽気に包まれた枕のように温かかった。この温度はどこへ繋がっているのだろう、と僕は思った。あるいはそれはどこにも繋がっていないくて、虚無に吸い込まれていくのをただ待つだけなのかもしれない。彼女の発していた緊張は次第に吐息へと変わり、それからゆっくりと喉に掠れていつ僕に届くようになった。それはとてもか細く、そしてしなやかに震えていた。

彼女が何を感じているのか、そのすべてが知りたかった。だけど

そこでは言語というものは明らかに邪魔なだけだった。そこですべてを語るのは重さや温度や感触だけだった。僕がまさぐっている手を激しく動かすと彼女もまたそうした。ゆっくり撫でつけるようにしたり、強く押しつけるようにしても彼女は同じ所作を返した。彼女と僕はとろんとした視線を不意に投げつけては取りそこねていたが、それが交わるとお互いの行為にどことなく滑稽を見つけてしまった。そして照れ隠しのようになくすくすとした笑みをこぼした。その滑稽は罪悪感にも似ていて、そしてそれを共有していると解るところとは胸がくすぐったくもあり、新鮮でもあり、どこか懐かしくもあった。

彼女の中にもっと多くの共有を見つけない、と僕は思った。そのためにはどうすればいいか。これ以上のものを求めるだけだ。それは両立などではなくひとつになるということであって、それ以上でもそれ以下でもなかった。

僕は空いているほうの手で彼女の肩を抱き寄せた。狭い場所で体育坐りという無理な体勢だったがなんとか顔を近づけようと努めた。お互いの唇がS極とN極のように吸い寄せられているのが解る。彼女だってそう感じているはずだ。だけど届かない。あと五センチもないのに。彼女の吐息がかかった。薄目を開けている。今だけは頬と横髪ではなくて、唇だけを見つめてみよう。これからは唇だけしか見れなくなるかもしれない。そういえば鼻を無意識のうちに交わしている。いつかどこかで聞いたことがある。こういうときは鼻がぶつからないように意識してしまうらしい。それはなんだか狭い道を自転車で走っているのと似ている。対向車が正面にいたら自分はどちらに避けるか。僕はそういうことにならないよう常に左側に寄るくせをつけている。左側を走っていればよほどの馬鹿じゃないかぎり勝手に反対側にそれていくものだ。だけど右側に寄るくせをつけている奴がいたらどうしよう。やっぱり誰もいない道をひとり走っていたい。その瞬間、僕は彼女との間に隔たりがあることを思い知った。彼女は僕の肩に手を置いて、それから突き放そうとし

て止めた。

彼女のせいだ、と僕は思った。僕が未だに焼却炉の隣の物置に隠れていなければいけないのは、あのとき彼女が突き放してくれなかったからだ。私がやさしいって？ と彼女は言った。私はね、価値が欲しいの。何物にも揺らぐことのない絶対的な価値が欲しいだけなの。それが彼女のやさしさだった。代わりはいくらでもいるのに、どうして僕なのだろうか。どうして僕を突き放さなかったのだろうか。

彼女は体育坐りをしていた僕をベッドの上で解き放った。それから僕を押し倒し、その上へ覆いかぶさるように彼女自身も倒れ込んだ。ベッドのスプリングの弾力を含んだ真つ白なシーツの中で彼女のおやかな身体の稜線を感じた。それは彼女の着ているごわごわとしたブレザーの生地越しの感触だが、そこに包まれているのは紛れもなく彼女だった。襟元にのぞく白い首筋を辿った先が胸だった。袖からはみ出た細い手首の延長が腕だったり、あたりまえのようにそこにあるはずの姿なのだ。だけどそれを感じるには常に何かを媒介しなければならなかった。

彼女はところどころ掻き乱れた髪を気にしなかった。そのまま頬に張り付いた、耳の後ろ辺りから伸びている鬢と一緒に唇を僕の唇に押し当てる。舌を絡め合ったり、唇を舐め合ったりしていると、唾液に塗れた鬢の先がまるで邪魔をするかのように彼女と僕の間をつきまとう。それを噛み切ってしまったかっただけで、彼女の唇も一緒に傷つけてしまいそうだったのでやめた。そしてねばねばと呼応する吐息と共に彼女と僕を紡いだのは、そのしつとりとまとまった数本の髪の毛だった。僕の好きな彼女の部分はくしゃくしゃになっていった。

あなたの、と彼女は言った。全部ちょうだい。

かつて僕は、彼女のためならすべてを放り出してもいいと思っていた。そして今たしかにすべてを受け入れようとしている彼女が目の前にいる。

キスが上手になったね、と僕は言った。彼女は潤んだ瞳をそのままにしている。キスは上手になつたくせに。

彼女は沈黙した。

だからって僕は突き放されなくて済んだわけじゃない。

沈黙。

結局僕らはどんなにキスが上手になろうとも、どこにも行けないままなんだ。

沈黙の中に、ときおり鼻をすする音が聴こえる。彼女は僕の髪や頬や、首筋や、ワイシャツに自らの残り香を擦りつけてからゆつくりと身を起こした。それから腿の半分くらいの丈のスカートを跳ね回らせながら、まるでそれを吸い付くひだのように見せながら膝から開いた脚の中に僕を包み込んだ。彼女と僕の触れ合った部分はお互いに弾力を張り合ったり擦り合ったりしながらゆつくりと温度をひとつにしていく。それから部分的な重さを失っていく。しかし彼女が捲りあげたスカートの中にはふたつの固体の境界線があった。それが何を意味するのか、しばらく僕は解らないままだった。

嘘よ、と彼女は言った。いままで付き合ってくれてありがとう、もういいから、あなたはもうこんなところに隠れてちゃいけないのよ。

たしかに僕はここにはいけないのかもしれない。しかしここ以外に場所はあるのだろうか。仮にあつたとしても、それは場所と呼べるようなものではないだろう。それはおそらく無理やり掻き分けてつくった隙間のような、あらゆるものを拒絶することでしか存在を保てない存在だろう。存在を保てない存在とはどこか矛盾しているようにも思えるが。君も、と僕は言った。君もこんなところに隠れてちゃいけない、僕らはなんていうか、うまく説明できないけど君の言つた流行をもてはやす奴らと同じだから、同じように違うところにいる。

私は奴らとは違う、奴らは死んでるの、既に存在してないのよ、だけど私は生きてる、ここに存在してる、これからだつてずっとそ

うよ、そのためにあなたが……。

聞きたくない。

気がつくときスをしていた。なぜかは解らない。ただひとつ解ったことは、僕は彼女に利用されていたのかもしれないということだけだった。しかしそれでも構わない。存在を保てない存在を恐れていた僕にはそれくらいしかできなかったし、僕にとってもそれだけで充分だった。彼女は口の中に溜まった唾液を垂れ流す。それは僕の舌に落ちる。少し冷たい感触がして、それから僕の唾液と混ざっていく。吐息が絡み合うたびに分泌が著しくなっていく唇から零れ落ちそうになる。慌てて彼女に移そうと舌をつかって擦り付ける。溢れた量があごの辺りを伝う不快感を覚える。彼女は舌でそれを拭おうとするが、その所作はどこか覚束なく余計に口の周りに散乱してしまう。そして僕は彼女がしたようにし返す。それから絡み合う吐息の生臭さも忘れてただ夢中になっていた。いつの間にか口の周りに塗りたくられた唾液は乾いていき、そのうち不快感も気にならなくなった。

もうすぐ夜が明ける、と彼女は静かに囁いた。

学校に行かなきゃ。

学校はあそこ、と彼女は窓のほうを見向きもせず適当に示した。僕もその指先の向こうを見なかった。どうでもいい、と思った。

それから彼女は馬乗りになった状態から僕の両腕を押さえつける。身を屈めながらショートカットの髪が垂れ下がるほどに顔を寄せる。くしゃくしゃの毛先が僕の頬をくすぐる。そして彼女は僕の眼をまじまじと見つめる。僕は今どんな顔をしているのだろう。やさしく微笑んだ彼女の瞳には、どんな僕が映っているのだろう。これだけ間近にしながらそれを確かめることはできなかった。なぜかは解らないが、僕はその更に奥にあるものを見ようとしていた。

突然、息苦しさを覚える。それは後ろ襟の隙間から背中に氷の欠片を放り込まれたかのように反射的で、それでいて撫でつけるように丁寧な感覚で脊髄を走っていた。それと同時に、私が守ってあ

げる、といつかの彼女の言葉を脳裡に残して僕の呼吸は止まる。彼女は相変わらず僕の上に馬乗りになっていて、両手で首をわしづかみに押さえつけている。それは腰の動きにあわせて圧迫の波を繰り返していく。性器からの快感よりも官能的に思考を支配していく。そのまどろみの中で、僕は感情や認識といったものを忘れた。そこがベッドの上なのか、それとも意識の中なのかも解らない。そこには彼女がいて、僕がいて、噴水があつて、あとは何もなかった。

どこまでが地面でどこからが空なのだろうか。あるいはそこは屋外ではなく壁に区切られた部屋のような場所なのかもしれない。もしくはそのどちらでもないのかもしれない。そこが四次元空間と叫べるのかも解らない。そこには噴水があつて、そのほとりに彼女と僕が一糸まとわぬ姿で腰を下ろしている。噴水は半径十メートルくらいの汀に囲まれていて、その中央にある美術の教科書に載っているような石像の掲げている瓶から水が高々とほとばしっている。ただ、その水のアーチは上に高いばかりで飛距離はあまり稼げていない。決まった質量の液体を、決まった圧力で、決まった高さまで永遠に噴射しつづけていた。そして無尽蔵に湧き出す透明な曲線を生むか変化を期待するでもなく彼女と僕はぼんやりと眺めている。やがてそれにも飽きて彼女と僕は交わり始める。さまざまな形に変化してはそのたびに軋むような溶けるような声を張り上げたりする。不器用なまでに忙しく波を揺らしたり、奥の奥へと何かを探ったりもする。しかしいつまで経ってもその何かは正体を現さなかった。理由もなくただ無意味に求め合う部分は気づかないほどにゆっくりと癒着していく。それはある一定の刺激に対する便宜的な理由なのかもしれない。その理由に対する結果を受け入れるにしても、同じように便宜的に虚無へと放り込んでいるだけなのだ。

私はね、と彼女は言った。こうしてないと溢れちゃうの。

溢れちゃうって、何が。

あなたのせいよ。

噴水はただの飛沫に変わり、水面を一斉に叩いてから途切れた。

気がつくとも石像はなくなっていて、そこを中心にして何かに吸い込まれるかのようにあらゆるものが色や形を失っていった。すべてあなたのせいよ、と彼女は言った。あなたさえいなければ何も失うことも得ることもなかった、すべてが在るべきところへ在るべき姿に収まっていた、うまく言えないけど、なんていうか、あなたさえいなければすべての均衡が保たれていたの、私だつてこんなところに隠れてなくて済んだし、絶対的な価値だなんてそんな意味のないものを求めなくてよかったのに、でもね、もう駄目なの、こんなに気持ちいいことを知ってしまった後ではもう取り返しがつかないわ、だからね、私はこうしてないと溢れちゃうのよ、何もかもあなたのせいなんだから。

何もないところに投げ出されたあとは窒息に陥つた。すべての業が在るべきところへ、在るべき姿に帰って行く。それが現実だった。彼女も僕も、どこにもいなかった。いままで眼を逸らしつづけてきただけなのだ。少なくとも僕は気づいていた。そして彼女はとくに諦めていた。ここで一緒に死にましよう、とそのとき彼女は言った。それができないなら私を殺して。全身が一気に熱くなってから徐々に感覚を失って行く。手足の爪先から頭に向かって少しずつ消失していく。最後に見た彼女、あるいは彼女の視た最期は快樂に塗れた恍惚、歪曲した因果の顕現、果てしない純真と策略に満ちた自我。そしてまっさらな白だけになった。どこまでも続くそれについて、他に表現は存在しない。あるいは描写でき得るだけの言語はこの世に存在しない。ただの白、白、白。

僕らはあまりにも不完全すぎた。

不完全だから完全と思ひ込んでいたのね。

不完全なものが認識できる範囲はとても狭いから。

でもその中で満たされなければいけないって、なんだか皮肉ね。

人で在って人に非ずともいうべきなのかな。

まるで修羅ね、私たちって。

ごめん、本当は最初から気づいてたんだ。

もういいのよ、すべて終わったわ。

最後にひとつだけ教えて。

なに。

どうして僕だったの。

その前に、どうして私だったのか教えて。

選ばれた理由を聞きたいのは僕のほうだよ。

選んだのはあなたよ、私は選ばれたことを決めたの、つまりあなたの知りたいことは決められた理由、そして私の知りたいのは選ばれた理由。

そうか。

私を選んだ理由を教えてください。

よし、よく聞けよ。

よく聞く。

好きだから。

それで。

それだけ。

あとは。

それ以外にあるもんか。

なんだか単純ね。

そういうものだよ、君だってそうだろう。

ごめんなさい、私は違うの、説明するとちょっと長くなっちゃうけどいいかしら。

いいよ。

私はね、誰でもいいから殺してみたかったの、それだけだとあなたと同じで単純な理由だけど、好きっていう感情に比べて死は本当に単純なものなの、死んでしまったらそこで何もかもおしまい、だからね、それだけじゃ面白くないから私にとことん惚れさせてから殺すの、私を繋ぎとめておく楔を、それこそ壊れるくらいに誰かさんに打ち付けて、そしてあの世とこの世を超えて私たちは結ばれるの、それって永遠って呼べないかしら、愛する人を失うのはつらい

ことつてよく言うけど私は最高の悦楽だと思っわ、たとえば誰かさんが死ぬ間に私の名前を呼んで私の手を取って愛してるよとか一緒にいてあげられなくてごめんとか言うの、それでね、私はその誰かさんの手を握り返して私も愛してるわとかずっと一緒にいってあげるとか、それで動かなくなったら手を振りほどいて蹴っ飛ばしてつばを吐いて笑い飛ばすの、考えただけでぞくぞくしてきちゃう、きつとそれは官能的な快楽なんかよりもずっと気持ちいいんでしょうね、だから私はそのためだったらどんなことでもするの、あなたの望むことだったなら何でもしてあげる、やりたいって言うてくれればいつでもセックスしてあげるわよ、その代わり気持ちよくしてくださいってひれ伏してね、そのバカみたいな浅ましさが私を楽しませてくれるから、だけどあなたはやりたいたいなんて言ったことはなかった、ただ『車輪の下』を読んでるだけで私のことなんて見向きもしなかった、だから。

だから？

何でもない。

何でもないなんてことはないと思うけど。

もういいのよ、すべて終わったって言ったでしょ、それだけだから。

もう元に戻れないと知っていながら、僕らはここまで来た。あるいはそれが解っていたとしても事実は変えられなかっただろう。僕は誰に伝えるでもなく叫び続ける。ごめん、本当は最初から気づいてたんだ、と。

かくれんぼをした次の日の朝、僕が教室に入ると皆が一斉に此方を振り向いた。それから少しの間だけ沈黙して、貪欲な視線は解けていきまたざわつき始めた。明らかに何かが変わっていたが、僕はどうでもいいことだと思っことにした。ただひとつ気になることがあるとすれば、教室に彼女がいなかった。黒板に彼女と僕の名前が書いてあって、廊下の向かい側にある特別教室に来なさいとあった。彼女は先に来ていた。広い特別教室の隅にある長い机の前で、彼

女と先生は向かい合って坐っていた。僕が扉を閉めると、空いている席に着くよう先生は促した。そして僕は彼女の隣に腰を下ろした。「昨日のことだけど」と先生は切り出した。だけど僕はそれを聞いたきり、その後の話は頭に入らなかつた。僕は昨日のことを必死に思い出そうとしていた。しかし脳裏に浮かんでくるものは、窓の外の青空を飛ぶ鳥は夜の間はどこでどうしているのだろうかとか、教室の皆はちゃんと自習のプリント問題の穴埋めをしているだろうかとか、まったく関係ないことばかりだつた。「どうして黙っているのか」と先生は言った。どうして黙っているのだろうか。体育をサボつてセツクスをしていたと言えば済むことだ。彼女のほうに眼を遣ると、最初に先生と向かい合っていたときと少しも表情を変えずそこにいた。「どういう理由でここに呼ばれたかは解っているか」その質問の内容もそうだが、質問自体の意味が僕には解らなかつた。なぜ先生はそんなことを知ろうとするのだろうか。彼女と僕のことになぜ先生は口を挟むのだろうか。

「これがどういう意味か知っているのか」と先生は言つて、イギリスの国旗の載つたからを机の上に置いた。それは、そのとき彼女が持っていたものだつた。彼女はそこから取り出したものを僕に被せてくれた。とても無邪気な所作だ、と僕は思った。こんなものうちではもう使わないわよ、とそのとき彼女は言つていた。お父さんが出ていったの、お母さんは単身赴任とか言つてるけど、最後に見たお父さんはお母さんとけんかしてて、もう五年も前のことだけだね、それ以来お母さんは入院するようになったの、だけど最近ちよくちよく帰つてくるようになってね、帰つてこなくてもいいのに、うざいから、それでね、そのたびに私のことをまるで人形でもあやすみたいによしよしとか言つて抱きついてくるのよ、おお私のかわいい娘云々あの男に汚されてもあなたは私の云々って感じで、バカみたい、あ、そうそう五年前に何があつたかというね、お父さんと一緒に風呂に入っているとき私卑猥なことされたの、それをお母さんが見ちゃつたつてわけ、それで頭おかしくなつて入院、きつと元

からおかしかったのよ、私が何をしようかあの人には関係ないことなのに。彼女の家庭の事情がよく理解できないまま、僕はなんとなく相槌を打った。ミチコロンドンなくなっちゃった、今度はなまでやろっね。

ねえ、と僕は言った。君はそれがどういう意味か知ってるの。

やりたいんだから別にいいじゃない、あなたもそうでしょ。

どうして僕なの、他の男子を誘ってもよかつたんじゃないの？

彼女は曖昧な笑みを浮かべて、鼻にかかった「ふ」とも「ん」とも取れないような声を洩らしながら僕を上目遣いにじっと見つめた。それから三年後、彼女の母親が寝室の戸棚のミチコロンドンがなくなっていることにやっと気づいて彼女は居場所を失った。こうなることは最初からわかっていたのかもしれない。漠然と気づいていながら、快樂が目の前にちらつくたびにその予感をお互いにかすめ合っていたのだ。結局、なまで行為をしたのはそれから三年後のことだった。

放課後、彼女は僕の手を引いて屋外のトイレに連れていった。防災備蓄倉庫と並んで、校庭の隅にトイレは建っていた。壁の塗装はところどころはげていて、そこにサッカーボールの模様の泥がついていた。そして周りの茂みには、ときどき使用済みのコンドームが落ちていたことがあった。女子トイレの個室の中で彼女は声を潜めて、私妊娠したの、と言った。おめでとう、と僕は返した。

もうちよつと驚いてもいいんじゃないの？

驚いてるよ。

あなたの子よ。

名前は何かいいかな。

彼女はふくれっ面をした。それから、ポケットからカッターナイフを取り出して手首を切った。傷口からは血液が次から次へと押し出されるように溢れていて、大粒の雨のように床に降り注いだ。そして彼女は傷口を僕の口に押し当てながら、今日ちよつと付き合っで、と言った。血小板の感触が舌に纏わりつき、やがて軟らかい金

属のような匂いが鼻の奥から立ち昇ってきた。

どこへ行くの。

秘密。

いいけど門限は？

大丈夫よ、家出してきたから。

家出？

彼女と僕はゲームセンターに入った。その瞬間、踊りながらパネルを足で踏んでいくゲームから轟く、スピーカーの底から這い出てくるような重い音や、自動車レースのゲームから爆ぜる、コーナーを曲がりきれなくてガードレールを突き破って車体が派手に踊り狂う音が耳を貫いた。そして薄暗い中に瞬いては、爆発的に視界を制圧してしまうような閃光から発生するレーザー光線に眼が眩んだ。僕はそういう喧騒に疎かつたので、彼女の歩を進めるが儘に手を引かれて往來を縫っていった。そして興奮の渦巻くネオンサインやメダルの津波の中に彼女の楽しそうな横顔を垣間見たような、そんな気がした。

こういうところにはよく来るの？ と僕は尋ねた。彼女は何も答えず煙草に火をつけた。箱から器用に一本だけ出し、それを口にくわえ、先端にライターの火をつける一連の動作を僕は初めて見た。

しばらく彼女と僕は、全国オンラインのクイズゲームをお互いに知恵を出し合って攻略していた。何度かいいところまで勝ち残ったものの結局一位にはなれなかった。それから僕は席を立った。人込みを掻き分けているときに何度も涙がこぼれそうになって、表に出たときにはもう駄目になっていた。駐車場の隅の、停めてある車の陰に隠れて僕は泣いた。何が悲しいのか、あるいは悔しいのか、それとも嬉し泣きなのか、たぶんどれでもないだろう。彼女が言っていた、妊娠したという嘘があまりに可笑しかったからだ、と僕は自分言いに聞かせていた。可笑しいのなら笑うべきなのだが、彼女と僕が子供を連れて散歩をしている姿を想像するとあまりにも現実離れしていて、僕は涙を流さずに、制服を着て学校指定の鞆を提げて

いる自分自身を顧みることができなかった。

どうしたの、と彼女は言った。何か怖いことでもあったのかな。いつの間にか日は暮れて、外灯が点く時間になっていた。僕は彼女の左手を掴み、腕をまくって切り傷を見た。まだ出血が止まっていなくて、皮膚が捲れ上がった間からじわじわと滲みだしていた。ブラウスの白にくつきりと境界線が敷かれていて、そこにはどす黒い紅があった。とても綺麗だ、と僕は思った。そして舌で必死にそれを拭った。彼女は何も言わずに、いつまでも僕を見ていた。血は軟らかい金属のような匂いではなく、海の匂いがした。

海は見えるだろうか。

ゲームセンターから手を繋いだまま暫く歩いた。歩道が狭くて、道行く人たちがひどく邪魔に思えた。特に歩幅が狭かったり、立ち止まっている人がいるとそれを避けるのにいちいち気が滅入った。それでも彼女は僕の手を引いてずんずんと進んでいった。僕はいつもと方角が違うほうへ歩いているのが気がかりだったが、彼女が家を出をしたと言っていたのでなるべく気にしないようにした。そしてそのうち国道沿いの細道に入ったところで止まり、お城のような建物の目の前に来た。彼女は、夜景が見たい、と言った。

僕はコンビニでアイスを買ってくるのの小銭しか持ってないよ。

彼女は財布から札を何枚か取り出しながら、この世の中ばれなきや何をやってもいいのよ、と言った。私たちが何をしたところでどうでもいいことなんだから。

じゃあ学校を辞めて僕らの子供を育てようか。

妊娠したつていうのは嘘よ、と彼女は言った。それから僕は、生まれてくる子供につける名前をぼんやり考えていたが、男か女か解らなかつたので暫くして諦めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8802n/>

夜景

2010年10月8日13時58分発行